

江流は大だ自在なり

坐穩やかにして興は悠なるかな

唐・杜甫「船を放つ」

●川の流れというものは、旅人にとつて、まことに自由自在なものだ。船に乗っていると、じつと静かに座っていられるし、興趣にも、ゆつたりとしたものがあるのである。*徒歩の旅や馬の旅と比較して言っている。

江流 箭の如く月は弓の如し

行き尽くす三湘 数夜の中

唐・熊孺登「湘江に夜汎ぶ」

●湘江の流れは矢のように速く、空には弓のような三日月がかかっている。瀟湘、瀟湘、蒸湘の三つの流れを、わずか数夜のうちに行き尽くしてしまった。*「三湘」は、湘江を大體、上流、中流、下流に区切った呼び方。

広陵 三月 花正に開くとき

花裏に君に逢いて酔うこと一廻せん

唐・李遠「黄陵廟」

●黄陵廟の前は、かやつり草が茂っていて春らしい景色だ。黄陵の女の子たちは、春着の真新しい茜色の裳（スカート）を着けて遊んでいる。*「黄陵廟」は舜の妃で、舜の死後、湘江に身を投げて死んだ娥皇と女英を祀った廟。

行路難 水に在らず山に在らず

只だ人情反覆の間に在り

唐・白居易「楽天」「太行の路」

●人生行路は困難である。だが、その困難は水や山にあるのではなく、ただ人情の反覆、定め難いところにあるのだ。

荒を開く南野の際

拙を守りて園田に帰る

晋・陶潜「淵明」「園田の居に帰る」

●南の野原のそばで荒地を開拓することにして、世渡りの拙さを拙いままに守り通して、私は故郷の田園に帰ってきた。

孤雲 野鶴を將る

豈に人間に住まんや

唐・劉長卿「上人を送る」

●離れ雲が、野に栖む鶴を見送るように、孤独な僕は、

唐・韋応物「柳郎中の春日揚州に帰らんとし、南郭にて別れらるるの作」に酬ゆ

●君が帰る広陵（揚州）の三月、いよいよ花が咲いたならば、その時は花のもとで、ぜひ君と会い、一緒に一度、快く酔いたいものだ。

荒涼たり廢圃の秋

寂歴たり幽花の晩

宋・蘇軾（東坡）「新城の陳氏の園、晁補之が韻に次す」

●秋の廢園は、荒れはてていて物寂しい。夕暮れに人知れず咲く花は、ひっそりとしていて、いよいよ心寂しい。

黄陵廟前 莎草の春

黄陵の女兒 茜裙新たなり

唐・李遠「黄陵廟」

●黄陵廟の前は、かやつり草が茂っていて春らしい景色だ。黄陵の女の子たちは、春着の真新しい茜色の裳（スカート）を着けて遊んでいる。*「黄陵廟」は舜の妃で、舜の死後、湘江に身を投げて死んだ娥皇と女英を祀った廟。

清逸な君を見送りたい。君のような人が、どうして俗世間に住むことがあるのか。*成語「孤雲野鶴」の語源となつた一句。

故園 今 瀟陵の西に在り

江畔 君に逢うて酔うて迷わず

唐・王昌齡「李浦の京に之くに別る」

●故郷の家は、今でも瀟陵（長安郊外）の西にある。長江のほとりで、ばつたり君に出会い、酒を飲んで酔ってしまったが、故郷を思う気持ちだけは、しっかりといてるぞ。

孤猿 更に叫ぶ秋風の裏

是れ愁人ならずとも亦た断腸せん

唐・戴叔倫「夜 袁江を発し、李穎川、劉侍郎に寄す」

●その上、群れを離れた猿が、秋風に吹かれながら啼き叫んでいる。これを聞いては、胸に愁いを抱く人でなくても、やはり断腸の思いがすることだろう（いわんや、私は愁人なのだから、なおさらのことだ）。

芳草 復た芳草

断腸 還た断腸

唐・杜牧「池州にて春、前進士、蒯希逸を送る」

●ああ、芳しい春の草よ、芳しい春の草よ。それに付けても、ああ、この断腸の思いよ、この断腸の思いよ。

茅亭 花影宿り

葉院 苔紋滋し

唐・常建「王昌齡の隠居に宿る」

●茅ぶきの四阿には、いつも花の影が宿り、葉草を植えた中庭は、彩をなした苔に、しつとりと覆われている。

茫茫たる宇宙 人無数

幾箇の男児か是れ丈夫

唐・呂洞賓「自ら詠ず」

●この広大無辺な宇宙に、人の数は、それこそ無数だが、その中で、一体、何人の男が、真の丈夫と呼ぶにふさわしいだろうか（少なくとも、俺は、その一人だ）。

歌を歌ってみては、遠く離れた友のことを思うばかりである。

暮雲 千里の色

処として心を傷ましめざるは無し

唐・荆叔「慈恩の塔に題す」

●夕暮れの雲には、千里のはてまでも続くような趣があり、どこを眺めやっても、心を悲しませないところはな

北風 地を捲き白草折れ

胡天八月 即ち飛雪す

唐・岑参「白雪の歌 武判官の京に帰るを送る」

●北風が地を巻くように吹いて白草は折れ、ここ胡地の空には、秋八月というのに、たちまち雪が舞い飛ぶのだ。

北邙山上 墳塋を列ね

万古千秋 洛城に対す

唐・沈佺期「邙山」

茫茫たる江漢の上

日暮 何くに之かんと欲する

唐・劉長卿「李中丞の漢陽の別業に帰るを送る」

●果てしなく広がる長江と漢水のほとり、日暮れ時、あなたは一体、どこへ行くとうとしているのか。*往年の大將軍で、晩年に零落して帰郷する人を送った詩。

峰巒 随处に改まり

行客 名を知らず

宋・歐陽修「遠山」

●（山を見ながら歩いていると）山々は行く先々で姿を変え、旅人である私は、その山々の名前すら知らない。

帽を落として山月に酔い

空しく歌って友生を懐う

唐・李白「九日」

●（重陽の節句の酒に酔っ払った挙げ句）風に帽子を吹き落とせながら、山上の月に酔い、ただ独り、空しく

木末の芙蓉花

山中 紅萼を発く

唐・王维「辛夷塢」

●梢に咲いた蓮の花、さながらに、辛夷が山の中で紅い花を開いた。*これは、いわゆる辛夷ではなく、木蓮であるとの説が有力。

牧羊 辺地に苦しみ

落日 帰心絶ゆ

唐・李白「蘇武」

●（匈奴に捕らわれた蘇武は）羊飼いの仕事をさせられて辺地に苦しんだ挙げ句、落日を眺めるにつけても、もはや故郷へ帰る望みも絶えはてしまったのである。

暮景 千山の雪

春寒 百尺の楼